震動人

発行人　金沢真宗学院
代表者　小林　斉
金沢市安江町15-52
金沢教務所内
電話　076-265-5191

第27号

「我が身を生きる」

安江俊堂

仏教に四苦八苦という言葉があります。私達の人生で、一人の例外も無く出逢っていく出来事です。生まれた命の数だけ死があります。以前、一人暮らしのお婆ちゃんの家へ、ご主人の月命日のお参りに伺った時のことです。近所のお婆ちゃんが遊びに来ておられて三人でお茶を飲んでいた時に、近所のお婆ちゃんが「私はこの先、十年カンカンに生きんなんと思うとるがや」と言われた時に、その家のお婆ちゃんが「お前さん、その十年、何をなさる御つもりや」と質問されたのです。すると、十年生きると言ったお婆ちゃんが、返事に困ったのか「うーん」と唸った後、「ほんやかて、損やもんの」と答えられたのです。私にはその言葉が、「自分が一生懸命に生きてきた人生の意味が解らない」と言っておられるように聞こえました。

その時はお二人とも八十歳位でしたから、戦前、戦中、戦後と苦労を重ねて来られたのでしょう。そして気がつけば、自分の死という事を考えずにはいられない年齢になっていた。改めて自分の今までを振り返ってみると、この身が抱えたその時その時の事情に対応してきただけで、結局は我が身の事実に追いまくられただけだったのではないのか。ましてこの身は、自分がこういう事情を抱えたものとして生まれたいと願った覚えもない。だとしたら、自分が生まれた事から始まって死に至るまで、被害者ではないか。苦労をしてきたのは確かなのに、そのことの意味が分からない。このままでは死ねないと言っておられるように思えたのです。蓮如上人の帖外御文に「衣食支身命とて、食うことと着ることのふたつかけぬれば、身命やすからずして、かなしきことかぎりなし」という言葉がありますが、私たちの日々の生活の問題は衣食住の確保と思われます。何故なら、この身は、毎日食べ続けなくては命を保てないという事情をかかえているからです。そのことは、私という存在は、この身がある間、経済問題から無関係では在りえない事を意味しますし、そこには様々な競争が生まれてきますから、結果として、上下の人間関係を作り出していきます。また成長するに連れ名前が増えてきますし、同時に、対応しなくてはならない事情が増えていきます。真宗大谷派教師となった時から、好き嫌いを言っておれない事情を抱えることもありますが、目を閉じているわけにはいきません。無視すれば、自身が大谷派教師であることを否定することになるからです。

とにかく「我が身を生きる」ことは大変な努力が必要なんです。しかし、その努力の全てが我が身の抱えた事情に向けられたのなら、私の人生を動かしてきたのは、私でないことは確かです。「そういう事情を抱えた我が身を、だからどのように生きるのか」の問いに、努力を振り向けないと、自分の人生の主役が自分でなくなってしまうのではないですか。だからこそ仏道を一緒に歩みましょうと、呼びかけていくのが僧衣を着ることを選んだ私達の役割かと思います。つまり衣食住の問題の解決のために努力を重ねていくのが世間の知恵ならば、その努力を重ねていかねばならない身を、だからこそどう生きるのかという道を求めるところに出世間の知恵という意味があるのでしょう。

食べなければ死ぬ身ですが、食べても死ぬ身をどう生きるのかという事を世間に問い続けていくことを放棄すれば、どれだけ寺を守ろうと衣を着ていようと、その道は世間を一歩も出ることのない、つまり仏道ではないといわねばなりません。この頃、あの時のお婆ちゃんが言われた「お前さん、その十年、何をなさる御つもりや」の質問が厳しく私に向けられています。

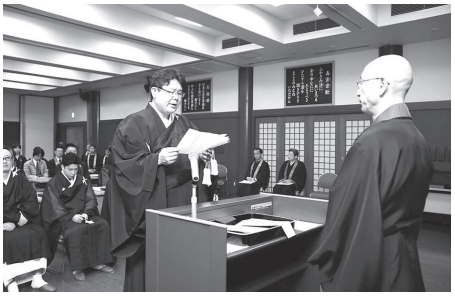
真宗学院を卒業して

田中　智之

隋唐時代の高僧、光明寺和尚善導は、『観無量寿経』の四部作の注釈書であり、禅定観法のできない下品下生の凡夫のための称名念仏による浄土往生の教説とその宗教的実践を示した『観経四帖疏』を記している。この書の中で「機の深信」と「法の深信」の二種深信により、弥陀の本願力に生かされて往生することを我が命の願いと自覚する心（回向発願心）を説明するために、自身及び我々凡夫の求道の姿として、道綽の『安楽集』の内容を脚色して、「二河譬」を記している。

以下、「三定死」と言われる一節を引用する。

『自ら思念すらく、「我今回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん。一種として死を勉まざれば、我寧くこの路を尋ねて前に向こうて去かん。すでにこの道あり。必ず度すべし』と。



金沢真宗学院における歩みは、常に私自身の努力とその成果を確認する日々であった。しかしそれは寺院の法要や葬儀で必要とされる知識や読経（声明）の技術の修得に限られ、これら仏事を通じての御門徒さんの死はあくまで私とは一線を画す死、つまり、「他人の死」であった。その「他人の死」の悲しみが、学院で学んだことと、どのようにつながっていくのだろうか。

金沢真宗学院を卒業するにあたって、「二河譬」における視座、すなわち、弥陀の本願に生かされ、私自身の生死が問われる世界、願往生の道にしっかりと立っているのかを、この三年間を振り返りながら深く問い直す機会を今、いただいている。

嶋作　三枝子

長きにわたって金沢真宗学院に通わせて頂きながら、沢山の感動を頂きながら、それらを言葉にできずにいるように思います。

振り返れば、寺族でない私は声明作法が苦手でした。ある日の授業で「お声明で大事なのは聞くことです」と教えて頂き、それからは聞くことに集中して、授業を受けるようになりました。

後期教師修練では、毎日、夕事勤行が勤まり、各班が順番に鑿役・調声人・『御文』の拝読を分担しました。初日から五日目迄は正信偈草四句目下、念仏讃淘三、和讃は各班が決めて行いました。しかし、最終日の班は正信偈真四句目下・念仏讃淘五・和讃「三朝浄土の大師等」でした。多くの修練生は足の心配と若干の不安と緊張をもって勤行に臨んでいたと思います。当日はその不安と緊張を持って聞いたためか、場の空気か、私には鑿の音がとても厳かに聞こえました。調声人の声も落ち着いており、続く修練生と先生方の声が大きく講堂に響きました。最初は一緒に称えていたのですが、これは聞いたほうがいいと思いました。五十二人の声が一つになって、講堂に響き渡り、その響きの真ん中に座っていたら胸が熱くなってきました。本気の声が響いていると思いました。

翌日の閉講式で道場長が前日の夕事勤行について話されました。「朝、講堂に入ったら、昨夜の夕事勤行の余韻が講堂に残っていました」と話され、やはり道場長も感動されたのだと思いました。

それ以降私はお内仏の前に座る

卒業式（2019.3.28）

時、この最終日の夕事勤行を思い出します。それは少し背筋が伸び、私の響きを聞き、自分を見つめる時間になりました。素晴らしい時間と機会を頂きありがとうございました。

キャンパスレポート

二年生　南部　唯称

私が真宗学院に入学して、一年が経ちました。元々家を継がなければならないし、せっかくお寺という場に生まれたのだから学んでおきたいなど、他にもいくつかの理由とタイミングが合った為にこの学院に入学を決めました。

入学してみて思ったことは、まず私がお寺に生まれていながら仏教について本当に何も知らなかったということでした。学院で聞くこと全てが新鮮で、新しい発見ばかりでした。

そういうお話の中で、いつも頭だけで考えてしまい、感覚が追いつかない、ということがありました。特に「ただ念仏する」ということはとても難しく、理解が難しいものでした。

しかしそれを肌で感じられたと思えたきっかけは在学中の祖父の死でした。亡くなった祖父は短い不定期な日記を残しており、自らの体調を察して死への不安を感じながらも必死に一日を生き、またそうできたことを感謝し「南無阿弥陀仏」を称えるような内容が綴られていました。それを見たとき、私はこれが「ただ念仏する」ということなのかもしれない、そんな風に考えました。

この考えがあっているかどうか、それを置いても、もし学院に通っていなかったら私はこんなことも考えず、祖父の日記もただ通り過ぎるだけのものだったかもしれません。こうやって祖父の死を見つめることが出来たのは私にとってとても得がたいことでした。そしてその得がたいことを得るきっかけをくれたこの一年に感謝しながら、残りの二年、まだまだ分からないことばかりですが頑張って学んでいきたいと思います。

移動研修会(2018.9.1～2)

二年生　舩見　圭祐

真宗学院入学式での学院長のお言葉に、「自分を通して物事をみる」というものがありました。

それまではどちらかといえば、物事は自分を排し、俯瞰してみた方が賢いような、そんなイメージを抱いていました。結果、あまり自身の考えを持たない人間になっていたように思います。そこに提示された、言ってみれば真逆の考え方です。自分にとって難しいもののように捉えられました。入学初日に触れたそういう視点に、新鮮な驚きを持ったことを覚えています。

一年間、真宗にまつわる色々な事を教えていただきました。宗教を学んだというよりは、今まで生きてきた中で積み上げた色々な考え方、その別の視点を紹介していただいたような感覚です。

その中でも「全ては関係性の上に成り立っている」というのは好きな教えのひとつです。日常の何気ない出来事ひとつとっても、様々な連続した関係の結果。考えてみれば当たり前のことの様に感じます。しかしそれらひとつひとつをもう少し丁寧に見ていくのはどうでしょうか。というお話でした。

ここで冒頭の「自分を通して」という視点でも考えてみました。世界は関係しあって出来ている。自分はその中のどの辺りに居るでしょうか。

どうにも、居ないことが多いような気がするのです。周りと自分を切り離して考えていることが多々ある気がしてなりません。この気づきは少しショックなものでしたが、学院で学ぶ機会をいただ

いたことで、こういったことを考える時間は増えました。

二年目にはどのような気づきがあるでしょうか。楽しみなような、怖いような、そんな気持ちでいます。

三年生　玄澤　映希

宗教は危険で非合理的だ。この様な印象を宗教に抱いている人は多いだろう。私もその一人だ。その考えは真宗学院で学べば学ぶほど強くなる。

学院というからには仏教の知識をただひたすらに学ぶものだと思っていた。しかし入学してみると知識はただのオマケみたいなもので、大切なのは仏道の生き方や仏教の考え方であると知った。仏教は非合理的だ。しかし非合理的でない人生や生き方などあるのだろうか。はたしてそれは「人」と言えるのだろうか

「真理」とは間違いでない道理の事だ。難しく聞こえるが、かみ砕くと当たり前のことだ。仏教はあたり前の事を学ぶ。ただ、そのあたり前の事を学院で学ぶことがきついのだ。そこには反論などない。喉元まで「それは違う」と出かけているが出ないのだ。何故か。私が間違っていたからだ。それはこれまで生きてきた自分の中の根本的なものを否定されるような気分になる。時には自分が惨めで情けなく感じたこともあった。宗教はこれまでの自分を壊す可能性がある。とても危険だ。しかし、宗教以外は安全なのか。これまでの自分を壊すことはいけない事なのか。

学院に入学し、私の中の様々な価値観や常識が壊れ、変化した。前文のような考え方も出来なかっただろう。何より自分を受け入れる事が出来るようになった。もし、昔の自分が今の自分を見たら、間違いなく「負け犬」と言うだろう。しかし、負け犬だろうが勝ち犬だろうが、そこに「いる」だけで良いということに気がついた。この変化が好ましいものかは私にはわからない。しかし、入学前より間違いなく生きやすくなったのは確かだ。

移動研修会（2018.9.1 ～ 2）

三年生　星名　思

金沢真宗学院に入学させて頂いて、二年が経ちました。いつぞや短期大学生だった頃、実家にいる猫と一緒にいたくて、早く帰りたい、辛い、そんな二年だったことを覚えています。同じ長さであるのに、真宗学院での二年という時間は、自分にとって大切な時間のように思えます。

今までの私は、自分にも周りに対しても無関心だったのだということに、度々気付かされます。それは今まで自分のこととして受け止められなかった、「分別心」を起こしてしまうことや、知らずと行ってしまう「罪悪」といった仏教的な視点からだけではありません。この学院に通うことによって、生徒として多くの人と時間を一緒に過ごせたこと、日常のお話や、感話を聞いて、誰もが色んな環境と状況の中、様々な気持ちに動かされてここにいるということに、頷くことを知りました。それぞれの経験や体験や思いが、必ずしも共感されるわけではなくても、どことなく少し共鳴しているように感じられます。そして、私自身もこの二年間、自分の意思で来たと開き直ることもありますが、自分一人で通うことができたわけではなく、家族や職場の人のおかげで、亡くなった猫と一緒に通うことができているのだと思うことがあります。

ここにきたのは、教義や儀式作法を学ぶためだけではなく、私自身の生き方を確かめるためだけでもなく、色んな人の求道心に触れさせて頂いて、頷ける自分を知るためでもあったようにも思います。残りの一年を、大切に過ごしていきたいです。

学院報恩講（2019.1.15）

金沢真宗学院特別講義 開催報告

当学院の特別講義は、年に十回ほど開かれます。各分野で活躍されている先生方が、指導や学院生に向け、専門的な知識を踏まえて丁寧にお話しされます。

今回より、講義内容のほんの一端を紹介させていただきます。限られた文面では誤解や不都合を生じることがあるかと存じますが、学院卒業生をはじめ、皆様方に少しでも教えに触れていただきたく、このような形をもって紹介させていただきます。

2018年度 金沢真宗学院特別講義 開催一覧

開催日	講師		講題
2018年6月29日	坂谷 学称 氏	本廟部堂衆	お給仕のこころ
2018年7月5日	藤場 芳子 氏	金沢教区常讃寺副住職 女性室スタッフ	女人性という差別 ～教えと現実のはざまで～
2018年7月27日	宮下 晴輝 氏	大谷大学名誉教授	なぜ仏土なのかという問いを前にして
2018年8月23日	田畑 正久 氏	佐藤第二病院院長 龍谷大学大学院教授	医療現場で求められる仏教
2018年8月24日 2018年12月14日	三木 彰円 氏	大谷大学教授	『教行信証』の課題と願い①、②
2018年9月14日	西本 祐攝 氏	大谷大学講師	清沢満之と宗教
2018年10月17日	堀田 護 氏	岡崎教区第七組本宗寺住職 全国准堂衆会会長	真宗の仏事(大谷派声明)
2018年10月25日	安藤 弥 氏	同朋大学教授	東本願寺総会所の歴史
2018年12月19日	小谷信千代 氏	大谷大学名誉教授	親鸞の往生論

坂谷 学称 氏「お給仕のこころ」

本山御堂衆の坂谷学称氏による今回の特別講義は「お給仕のこころ」と題して行われた。

「お荘厳とは昨日今日できたものではなく、長い年月をかけて洗練され形づくられてきたものである。多くの先達が守り伝えてきたものを今担っているのが我々とも言える。そして、その受け継いだものを次の世代に伝えていく責務が我々にはある。」ということが教師となる者の立ち位置としてまず確認された。次に中尊前、祖師前、御代前、余間の順に平常の荘厳と法要時の荘厳について説明があった。そして、戦時中に防火のため止むを得ずお灯明に灯芯ではなく電気を使用したことなど本山の歴史に触れながら瓔珞、菊灯、三具足、香盤などの仏具について述べられた。また一見同じように見える華瓶や輪灯の正面、建水板の上下の見分け方など細かな実務的な視点を交えた話や御仏供と斎・非時・点心、打敷の柄と季節、打敷と華束、香盒と焼香の頻度など関連性を交えた話があった。

「お給仕のこころ」とは、まず仏としっかり向き合い、物理的にできないこともあるが、本来、何のためにこの荘厳が整えられるのかをしっかり心得ておくことである。また、当派では阿弥陀堂をはじめ金がよく使われているが、それは色が変わらないという意味で普遍性、つまり、浄土の世界を表しているのである。本来は色も形もましまさずの法性法身の世界が方便法身の本尊、そして荘厳を通して、凡夫である私に働きかけてくださっているのであり、合掌し念仏申す大切なご縁となってくださっているとの内容であった。

日頃のお給仕の大切さを再確認するとともに、誰にでもできるお給仕が清掃であるとのご指摘通り、まずはそこから始めたいと思う。

(黒川 智光)

宮下　晴輝 氏
「なぜ仏土なのかという問いを前にして」

浄土真宗の信仰を持つものにとって「仏土」という言葉は、よく確かめられることもなく使われてしまっているのではないだろうか。講義を聞きながら、「仏土」という言葉の前を素通りしている自分にまず気づかされた。

仏弟子の信仰とはつまり、仏陀の教説をどのような課題を持って聞き取ったかという、仏弟子たちによる「如是我聞」である。釈尊は老・病・死の苦をいかにして超えることができるかを課題として出家した。そしてついに菩提樹のもとで悟りを開き、生死の苦しみを超えられた。いかにして我々も釈尊のように生死の苦しみから解放されるかという課題をもって、釈尊の教説を「如是我聞」した。

そこからなぜ、大乗仏教が興ってきたのか。そもそも大乗仏教とは何か。そのことを確かめるには、まずジャータカ物語とは何かを知る必要がある。ジャータカ物語は、釈尊の過去世における求道（供養）物語である。物語のキーワードは「衆生」である。釈尊はなぜ生まれ変わり死に変わりして菩提を求めたか。それは衆生を救済するためである。一切の衆生を救済するために菩提を求める釈尊は「菩薩」と呼ばれた。菩薩の誓願の内容は、一切衆生の仏道の成就である。釈尊が仏陀に成ったということは、菩薩の誓願が成就したということである。ジャータカ物語を通して釈尊観が変化したのである。「衆生と共に歩んだ仏陀と同じ心で我われもまた歩みたい」と願う仏弟子たちが誕生し、大乗仏教という新たな教説を「如是我聞」することになったのである。自利と利他が同時に実現される場所を表わす言葉が必要になったのではないか。それが「仏土」という言葉ではないか。

今回の講義は、大乗仏教のメルクマールともいえる「仏土」という言葉の前に立ち止まりながら、何とかその課題を聞き当てんとしてきた宮下氏の仏教研究の歩みそのものを話された、とても意義深い講義だった。

（平野　喜之）

田畑　正久 氏
「医療現場で求められる仏教」

田畑正久先生は、九州大学医学部に在籍中、仏教青年会で細川巌（いわお）師に師事する。医療と仏教が同じ課題に取り組んでいるとははっきりしなかったが、埼玉医科大学哲学の秋月龍珉（あきづきりょうみん）先生が医学部の学生に「医療の世界は、人間が生まれて老いて病気で死ぬという生老病死に関わっていくけれども、仏教が二千五百年前からこの生老病死に取り組み、その解決方法を見出している。同じことを課題とするわけですから、医療に携わる者はぜひとも仏教的教養を持ってほしい」と語りかけているものを読み、非常に勇気づけられたとのことであった。以下、印象に残った氏の言葉を要約して紹介しておきたい。

医療は、病気や怪我をした人を健康な状態に戻すことによって、苦を少なくしようという取り組みである。しかし、それは良くなる間だけである。具体的な老病死に直面した時には何も施しようがない。痛みを緩和する治療はできるようになったが、それ以上はお手上げだ。

仏教の生死を超える道は、仏さまの智慧をいただく、禅宗では悟り、真宗では信心をいただくことによって、私の思いが現実を受容する。病気という現実と思いが離れ、良くならない状態となったとしても、「これが私の引き受けるべき現実。南無阿弥陀仏」と受け止め生き切っていく世界が持てる。そのためには、医療者と仏教者が一緒になって、一人の患者さんに向き合う協力関係を培うことが望ましいのである。

延命は、医者の自己満足でないだろうか。患者さんには、延命よりはるかに強い欲求がある。長生きして何かやりたいことがある。「健康で長生き」は、何かを実現する為の手段、方法であり、それが目的になると、老病死に捕まり不幸の完成で終わってしまう。患者さ

んの視点に立つ、患者さんの人生観、価値観に寄り添うことが大切である。

細川巌先生に、これからだんだん弱って亡くなっていく患者さんに、どういう言葉を掛ければいいか質問した。すると先生は「一つには、『お任せする』ことが大事だから、『お任せする』ことをしっかり言ってあげなさい。そして、もう一つは、『仏さまがいらっしゃる』ことをしっかり言ってあげなさい」と仰った。一日一日精一杯生きて、あとは仏さまにお任せする。

医者であり、念仏者である先生の講義は、僧侶の尻を叩き、問を突きつけるものであった。

（永藁　和也）

三木　彰円 氏
「教行信証」の課題と願い①

「教行信証」とはどのような書物なのか。師は「顕浄土真実教行証文類」という正式な題名にもとづいて、「顕」・「浄土」・「真実」・「教・行・証」というそれぞれの観点から説明される。ことに「教・行・証」を「宗」として捉えることは、「教えをより所として道を歩むものになり、その上で大切なもの（「浄土」）が開かれる」と説明された上で、そういう「浄土・真（実）・宗」を「文類」という方法によって顕かにされたものが、いわゆる「教行信証」であると先ず押さえられた。

「文類」とは、「浄土三部経」を中心とした大乗経典、または七高僧をはじめ中国・朝鮮の論書などを集めたものである。「浄土真宗」を顕かにするために、一つのテーマごとにご自釈（聖人自ら解釈した内容）を記し、それを軸にして「文類」を分類・整理していく「教行信証」の基本的な骨組みについても触れられた。

後半は、聖人ご自身の経典を読む姿勢について言及される。『大経』異訳本をはじめ、膨大な経典の中の要となる文章（「要文」）をどのように見出していかれたのか。それは聖人が「経論」を繰り返し読まれたからだと言われる。その論拠として「総序」の文を取り上げ、問いをもって何度も繰り返し読まれた聖人の姿勢に触れられる。『「総序」とは、「教行信証」をお書きになられた聖人のおこころであり、身の事実となって伝わった感動です』。それ故、「総序」の中の「聞思して遅慮することなかれ」とは、聖人の呼びかけであり、それに応える私たちは、漢文が難しいとか、分かるか分からないかではなく、自らが〝聞く〟というところに立つことが、「教行信証」を学ぶ出発点であると力説されたのである。

「皆さん方は親鸞聖人が聞きとられたお言葉を聞こうとは思いませんか？」と問いかけられた上で、『聖人への敬い、そして聖人が敬ったことがらを敬うことを、私たちのところではっきりさせることができれば、「教行信証」は入り口の広い聖教である』と言われた師の言葉が、私自身は印象的であった。限られた時間の中で、「教行信証」を学ぶための最も大切な視点に触れることができたように思う。

（大窪　康充）

三木　彰円 氏
「教行信証」の課題と願い②

二回目の講義は、親鸞聖人がなぜ「教行信証」という書物をお書きになったのか、いわばなぜ浄土の真宗を顕かにしなければならなかったのか、という点を中心にお話をいただいた。それは先ず、聖人ご自身が浄土の真宗と出あったからだと言われる。そもそも「出あいとは一体どういうことなのか」、師は「自分の身の上において起こった事実を確かめ続けること、それも自分の思いの中で確かめるのではなく、本願との関わりの中で確かめ続けてゆくことである」と語られた上で、「その出あいとはあらゆる者に開かれるものでなければならない」と押さえられた。

さらに、当時の聖人をとりまく状況について考察される。法然上人に師事し、仏教は浄土に往生する以外にないという浄土宗の立場にある聖人は、比叡山や奈良などの他の仏教から問い詰められる。念仏や浄土の教えは、仏教全体の一部分に過ぎず、それだけを独立させて「専修」のみをうったえるとはどういうことなのか。また、出家や戒律を無視し、しかも三昧行の

境地や智慧を得ていないものが、ただ念仏を称えるだけで救わるというのはどういうことか。そういう外からの問いかけが、次第に圧力となり先鋭化されていく経緯において、「承元の法難」と「嘉禄の法難」へとつながっていく状況を、それぞれ上人の吉水教団に対する『興福寺奏状』、そして上人亡き後、『選択集』の開板をめぐる明恵の『摧邪輪』や『延暦寺奏状』の内容を中心に考察し説明していかれた。

このような当時の状況を踏まえ、「教行信証」とは、単に比叡山や奈良の仏教に対して批判し正論を称えるためのものではなく、どこに真実の仏教があるのかを確かめるために書かれたものであると教えられた。さらには、どんな人々でも迷いを超えていく専修念仏の仏道は、まさしく日常の生活の中にこそ開かれるものであるという一歩踏み込んだ視点まで語っていただいたように思う。最後に師は、「教行信証」がいつ書かれたのかという視点から、「立教開宗」の課題についても触れられた。

今回の講義の中で特に印象的だったのは、『恵信尼消息』（聖典六一六）の「同じように、生死出ずべき道をば、……」の文を取り上げ、その内容が他の仏教との根本的な違いであると言い切られた師の言葉である。自らの日常生活の聞法姿勢が改めて問われる思いであった。

（大窪　康充）

西本　祐攝 氏
「清沢満之と宗教」

清沢満之は、その生涯において、浄土真宗の寺門に入ることを縁として、自己の信仰・自己の信念の確立を課題として生きられた。その言葉その思索は非常に難解である。よって、この特別講義において、清沢満之の思想にすんなりと頷きを得るというわけにはいかないであろう。ただ、「自己とは何そや是れ人世の根本的問題なり」の一文に表されるように、どこまでも自己を課題とする姿勢に教えられることである。

現代という時代は、「宗教」というもの（及びその言葉の意味）が、あらためて問い直されねばならない時であろう。「自己」を課題とし、「自己」が問われるのが宗教である。清沢満之が「人世」と表しているように、それは清沢満之個人のパーソナルな問題ではなく、人の世、すなわち人間が人間として生きるならば誰しもにとって「自己」という根本的問題があるのである。

だが、ほとんどの学びというものは、自己を問うものではなく、「私が」ということを前提として始まる。つまり自己をおのずから〝在るもの〟として前提にし、その上で外からの知識を増やし活かしていく。そのような方法や手段を学ぶ学びである。医学も経済学も法学も政治学も全てそうである。だから、清沢満之は、「本学は他の学校とは異りまして宗教学校なること」と申すのである。「私が」ということを前提としない、「私」そのものを学ぶのである。

親鸞は、浄土真宗なる仏道を、「誓願一仏乗」として、本願によって成り立ち、本願に支えられた仏道として顕かにする。『仏説無量寿経』を真実教と顕揚し、本願他力の仏道として顕かにした。清沢満之は、この本願他力の仏道の宗義に基づく学びにこそ、「自己」という最大の問題を問う道をいただくのである。清沢満之の思想と生涯を学び、あらためて人間の宗教的課題を明確にいただくことである。

（小野　賢明）

堀田　護 氏
「真宗の仏事（大谷派声明）」

真宗の仏事とは何かということを、声明作法の観点からお話頂いた。師は、まず大谷派の声明が「暗唱口伝」であると示された。暗唱と

は諳んじることであり、口伝とは耳から聞こえた先生の声を体で覚えていくことと言われた。そして「声明」とは「作法」であり、作法ということは頭で覚えるのではなく、体で覚えることである。換言すれば、教えを教えのまま伝えていくことと押さえられた。

続けて声明とは「調和の声明」であると示された。聞かせる声明ではなく「聞きあう声明」であるから、共に声を出すことが肝要である。そのため、「声が良すぎてはいけない」「リズムが良すぎてはいけない」「物覚えが良すぎてはいけない」ということに注意しなければならないと言われた。何故なら法事は僧侶の独演会ではなく、教えに出遇う場であるからだと押さえられた。また、大谷派の声明は「かしずき声明」である。「かしずき」とは相手を大切にしていく生き方を示すことであり、皆で声を出し合って喜びを大切にすることだと確認された。

また、「念仏の出る声明」ということを示された。大谷派の声明は親鸞聖人が本願念仏の教えに遇い得た感動に同感していくことである。そして、宗祖を師と仰ぎ、自分が教えを聞いていくのではなく、宗祖の言葉に自分を聞いていく。そこに宗祖の教えを聞くことができた喜びが起きる。その喜びの表現が念仏の出る声明ということであると押さえられた。

最後に「野心に汚染された声明はするな。それは菩薩の死だ」という言葉を紹介されて、声明は自分を飾る道具ではない。大谷派の僧侶の役目は、宗祖親鸞聖人の生活や言葉を、声明、儀式、荘厳を通して伝道していくことである。そのことを忘れたなら正しい教えは伝わらない。「法式作法滅すれば、正法滅す」ということであると確かめて講義を終えられた。（道上　清樹）

安藤　弥氏
「東本願寺総会所の歴史」

最初に、東本願寺総会所の約二〇〇年にわたる歴史的軌跡について述べられた。真宗本廟は江戸時代後期以降四度の焼失・再建を繰り返してきた（①天明・寛政度再建一七八八年焼失、一八〇一年再建②文政・天保度再建一八二三年焼失、一八四八年再建　③安政度再建一八五八年焼失、一八六〇年仮再建　④明治度再建一八六四年焼失、一八九五年両堂完成）が、そのつど全国から御門徒が上山し再建にご尽力されてきた。特筆すべきは本山再建を法義相続の機縁といただき、ともに仏法を聴聞し語り合う「聞法道場」として開かれたのが総会所の始まりであるということだ。昼は再建活動に従事され、夜はともに聴聞されたのである。

以上のような経過で総会所が開設され、事業終了とともに閉所されてきたが、明治度再建後に常設化され、一九一六（大正五）年に真宗本廟向かいの地に建設され本山護持・法義相続の場として約一〇〇年間その願いを受け継いできた。建物の老朽化に伴い二〇一五年（平成二七）年六月二九日閉所式が執り行われ、新しくなった「真宗教化センターしんらん交流館」に引き継がれ現在に至る。

当時の御門徒お一人おひとりの本山再建の熱い願いと仏法聴聞への真摯な姿勢には言葉では表せない感動がある。それはそのまま後世を生きる私たちへの「お念仏申しておくれ」という心からの叫び・メッセージのようにも聞こえてくる。お念仏が私にまで相続されてきた事実に、先達のご苦労と志願が連続無窮の仏道の歴史となってはたらき続けていたことを憶うと、ただただ頭が下がる思いである。

その建物に入ると、静けさのなかに凛とした雰囲気を感じる。その建物のなかに座り、歴史を憶うと、「南無阿弥陀仏」の声が聞こえる。

その建物にしみついた、仏法の〝におい〟〝かおり〟がある。

（「総会所の歴史的検証」『真宗』二〇一六年十月号より）

（細川　公英）

小谷信千代 氏
「親鸞の往生論」

私たちは日頃、「念仏往生」「浄土往生」などと「往生」という言葉を当たり前の様に使っているが、果たしてその意味を正しく理解してい

るのだろうか。宗祖親鸞が、往生をどの様に理解し、受けとめ、語っているのか、そのことを親鸞自身の言葉によって確かめる必要性を感じ、今回、小谷信千代氏に講義をお願いした。当日は学院生、指導、卒院生を中心に約七十名が聴講し、関心の深さが感じられた。

氏は、倶舎学や唯識学が専門であるが、本山の安居本講の講師を勤めてから、『真宗の往生論―親鸞は「現世往生」を説いたか―』（法蔵館）を著すなど、これまでの「往生論」に一石を投じられた。今回の講義は、氏が執筆された『大法輪』「親鸞の説く往生は臨終の時」（二〇一八・一二）の内容に沿ってお話された。お話の内容は以下の三点にまとめられる。

一、「往生」のあいまいな用法、
二、「即得往生」は往生の因を説く、
三、読み替えの理由

冒頭、『岩波仏教辞典』の親鸞の項目を取り上げ、「真宗大谷派には親鸞が現世での往生を説くと主張する「現世往生説」が存在する」ことを紹介された。その上で、「往生とは、元々インドの言葉で、臨終のその時、死んで生まれ変わる言葉」として押さえられ、信心を得て後にはじまる生活を、親鸞は別の言葉で「住正定聚の生活」と述べていることを指摘された。そして、「正定聚とは、必ず仏になる位であり、本当の信心を得たときに現生でその位に就き、臨終のその時まで念仏の生活をし、死んで往生を得る」というのが親鸞の捉えた往生であると言われる。

次に「現世往生」説の根拠となった『大経』第十八願成就文、また、そこに説かれる「即得往生（すなわち往生を得て）」の語を注解した『一念多念文意』の文（聖典五三五）について検証される。この「即得往生」の「得」という捉え方について、往生が約束されたのか、それとも往生が実現されたのかを検討された。さらに、『教行信証』の「行巻」（聖典一七八）を論拠にして、「即得往生」は実現された往生の果ではなく、約束された往生の因を説くものであると確かめられたのである。

後半で氏は、曇鸞の二種回向、ことに還相廻向について触れられる。そして、『浄土三経往生文類』（聖典四六八）を論拠に、親鸞が第十八願を「往生の因」を、第十一願を「必至滅度、つまり往生の果」をそれぞれが成就することを説く語に読み替え、第二十二願を「還相回向」を成就することを説くものとして理解していることを指摘し、この三願によって凡夫が往生する次第が説かれていることに言及され、親鸞がなぜ元々の「経文」を読み替えなければならなかったのか、その真意を検証することによって、「現世往生」説が謬説（びゅうせつ）であることを語られた。

今回のテーマとは別に、「凡夫が往生することの意味を、親鸞は曇鸞の文章の中に見いだされ、大変喜ばれたと思う」と語られたことが心に残った。

（坂本　学）

特別講義（二〇一八年七月五日）・一泊研修会（二〇一九年二月十六～十七日）

講師　藤場　芳子氏

講題　「女人性（にょにんしょう）という差別　～教えと現実のはざまで～」（特別講義）

「性差別と向き合う　～それは一人の女性の問いかけから始まった～」（一泊研修会）

七月五日の特別講義、二月十六・十七日の一泊研修の二回にわたって、藤場芳子先生より教団における性差別についてのご講義を頂いた。

教団の中に温存されてきた性差別は、長く見過ごされてきた問題であった。確固としてある差別に対して、なぜ問題意識を持ち得なかったのか。まずその無関心な姿勢についての課題を挙げられた。差別とは見えづらいものであり、差別と認識できないところに差別は存在する。特権的立場にいる者は自分がその特権的位置にいることに目をつぶり、その権利を持たない者の苦悩に対して極めて鈍感である、ということが述べられた。

また仏教の歴史において、女性や、その女性の救

いはどのように語られてきたのかということが説明された。仏教は本来、女人性というような自性を認めない教えであるにもかかわらず、女性はその固有の性質として弱く劣った者、罪深い者であると語り続けられてきた歴史があった。その上で、そのような歴史の中にあって、その時代の表現を取りながらも、女性の救いの問題を自己の課題として向き合ってきた親鸞聖人や祖師方の歩みがあったことが確かめられた。

そして真宗大谷派における性差別の歴史と変遷については、長らくその差別体質を保持しながらも、時代社会の要請に応えるかたちで徐々に変わっていった教団の歴史を学んだ。

性差別は非常に大きな問題であり、また取り上げられるべき課題も多岐に亘っていたため、藤場先生には今年度、二回お越し頂くこととなった。先生は、性差別に向き合うこととは、「御同朋・御同行とこそかしずきて」、この一点に尽きると言い、真宗門徒にとっての重要な信仰課題であると指摘される。目の前の人と共に歩むことが如何にして成り立つのか。本当に通じ合う世界は如何にして開かれていくのか。様々な課題を丹念に見ていくことで、「共にある」ことを阻害しようとする我々の根深い差別意識をあきらかにして頂いた。

（平野　慶之）

『教行信証』入門③
善導の六字釈

平野　修

前回、『教行信証』の「行巻」に触れて終わりました。「行巻」は二つの内容に分かれます。前半は念仏の教行証を伝えた歴史、念仏が仏道であることを伝えた七高僧の歴史です。

そして後半が、念仏が大乗であることを証明することで展開しています。「行巻」では、この大乗ということをさらに厳密に、「一乗」という言葉で示されます。

この大乗、一乗ですが、もともと仏教では、二乗、すなわち声聞、独覚と言われる仏道の歩み方があったわけです。それは出家して独りになって仏の言葉に真向かいになる。ひたすら真理と真向かいになる人たちのことです。

そうすると、そういう声聞や独覚の有様からすれば、多くの人たちは仏陀の証りから外れることになります。

そこから、仏陀の教えは、出家してひたすら修行する人たちだけのものでなく、在家のものにも届いていくはずだということが出てきて、菩薩乗、これが大乗と言われます。

そしていろいろな経典が出てきます。在家の青年を主人公とした『維摩経』。また在家の女性が証りを得ることを主題とした『勝鬘経』という経典。

ところが在家、出家を問わない。どのようなものも証りを得ることができるとしたときに、問題が出てきます。『涅槃経』という大部の経典がその問題を見つけ出します。

どういう問題かというと、これは浄土三部経でいうと『観経』に関係するのですが、いわゆる「王舎城の悲劇」の物語です。

『観経』では韋提希が主人公ですが、『涅槃経』では、『観経』では大きくは取り上げられていない阿闍世のことが、その「梵行品」というところで正面から取り上げられます。

なぜ阿闍世かというと、どのような人も仏陀の証りを得ることができる。仏の証りは非常に大きな乗り物であるという大乗が提起されたときに、あの親を殺した阿闍世でも証りを得るのかという問題提起だったわけです。

この『涅槃経』についてはまた別の機会にしますが、ともかく仏教はどのようなものにも仏の証りを得ることができるということで、大乗、一乗ということが生まれてきます。

いま親鸞聖人は、南無阿弥陀仏という念仏の法が一乗を表している。在家、出家を問わず。善人、悪人を選ばず。修行の長短を条件とせずということを言うために、「行巻」に「一乗海釈」(聖典一九六頁)を

施されます。一応これだけ触れておきます。

さて、我々は『教行信証』に触れる機会があるわけですが、六巻に分かれた大部のものですから、何を示させているのか分からなくなる。そういう時に戻るところがあります。

それは『教行信証』というのは、法然上人の「ただ念仏」の意義を六巻に表したものだということです。南無阿弥陀仏の持つ意味を明らかにしようとしたものが『教行信証』。ですから分からなくなった時には、それと南無阿弥陀仏とはどんな関係になるのだろうかという問いを立て考えてみると、少し糸口が出てくるかと思うのです。

ところで、この南無阿弥陀仏が、経典に出てくるのが『観経』です。そしてその『観経』の「南無阿弥陀仏」の六字に注釈を与えたのが中国の善導大師（六一三～六八一）でした。

この注釈が、のちに法然上人、親鸞聖人に決定的な影響を与え、念仏の意義を明確にせしめたわけです。

「南無阿弥陀仏」は『観経』に二か所出ています。一つは「散善九品」と言われるところの「下品上生」に、

「合掌叉手して、南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するがゆえに、五十億劫の生死の罪を除く。」

（聖典一一八頁）

もう一つは同じ「下品下生」に、

「心を至して、声をして絶えざらしめて、十念を具足して南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するがゆえに、念念の中において八十億劫の生死の罪を除く。」

（聖典一二一頁）

この、南無阿弥陀仏と称すれば、五十億劫の罪、八十億劫の罪が消えるという『観経』の教説に、本気になって尋ね入ったのが善導大師でした。

善導大師はなにを根拠に考えられたかというと、それは仏が説かれたものである。仏説であるという一点です。

善導大師は南無阿弥陀仏の六字について、その著『観経疏』の「玄義分」で注釈をされます。六字釈と呼んでいますが、「行巻」に引かれています。

「また云わく、「南無」と言うは、すなわちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり。「阿弥陀仏」と言うは、すなわちこれ、その行なり。この義をもってのゆえに、必ず往生を得、と。」

（「行巻」聖典一七六頁）

この六字釈に先立って、善導大師には、もうひとつの六字の釈があります。

「無量寿と言うは、すなわちこれ、此の地の漢音なり。南無阿弥陀仏と言うは、またこれ西国の正音なり。また南はこれ帰、無はこれ命、阿はこれ無、弥はこれ量、陀はこれ寿、仏はこれ覚なり。かるがゆえに帰命無量寿覚と言う。」

（『観経疏』「玄義分」聖教全書一・四四四頁）

ここに「西国の正音」とあります。南無阿弥陀仏とは、西国つまりインドの国の発音であると。ナモというインドの言葉を音写して南無。アミターバーヤという発音を音写して阿弥陀仏というのだと最初に確認されます。

つまり善導大師がまず注意したのは、南無阿弥陀仏というこの言葉自体に、異常な力、特別な能力が備わっているのではない。呪文などではない。西国の発音にすぎない。この国の言葉に直せば「帰命無量寿覚」と言わなければならないと。

そういう意味では、大きな声でとか、あるいは数を多く言えばと考えるのは、南無阿弥陀仏を呪文のように捉えている傾向にあるわけです。

その点を善導大師はわざわざ注意されるわけです。発音にこだわってはいけないという問題です。

そして、では南無阿弥陀仏とはどういうことかということで、真正面から取り上げたのが「行巻」に引かれている六字釈です。

不思議なのですが、この善導大師の六字釈の表現が、なぜか我々の耳に残っています。考えてみると、それは蓮如上人の『御文』によると言っていいかと思うのです。

『御文』には何か所にも、善導大師の六字釈が用いられています。「南無と言うは、阿弥陀仏と言うは」、あるいは「南無の二字は、阿弥陀仏の四字は」というように、南無

阿弥陀仏をどのように心得たらいいのかという念仏の心得を、善導大師の六字釈をもとにして伝えようとされています。

蓮如上人の時代になると、南無阿弥陀仏を知らない人はいないような時代でした。けれどもその心得となると、呪文やまじないになったり、親、先祖への感謝を表すことになっていて、念仏の心得がはっきりしていない。

そのために蓮如上人は、善導大師の六字釈を用いて、念仏の心得を伝えようとなさった。ですから『御文』のそれは蓮如上人の六字釈と言ってもいいかと思うのです。

一応申し上げておきますと、『御文』で蓮如上人が示された南無阿弥陀仏の心得というのは、南無阿弥陀仏を信ずるということであると、信という問題を出されるわけです。

南無阿弥陀仏が分かるというのはどういうことか。それは南無阿弥陀仏を信ずることができたということだと。それは、南無阿弥陀仏に、仏陀の全てが収まっていると信ずることができたということだと。このことを伝えるために、善導大師の六字釈を何度も用いたわけです。

善導大師の六字釈に戻りますが、まず「南無と言うは、すなわちこれ帰命なり」とあります。南無というそれはインドの言葉で、腰をかがめてお辞儀をするという意味です。

ですから中国に伝わって翻訳されたときに、音写して南無ですが、その意味から「礼拝」とまた「帰命」という翻訳がなされます。

これは翻訳上のことですが、それ以上に重要なことが善導大師の六字釈に示されています。それが「阿弥陀仏と言うは、すなわちこれ、その行なり」です。

これがなぜ重要かというと、我々も仏様というと、なにかのイメージを持っていると言えます。そのイメージのもとになっているのはだいたい仏像です。しかし本当は仏様ということを知らないでイメージしているにすぎません。

ところが善導大師は、阿弥陀仏を表すのに行という言葉をもって仏を表されます。行をもって仏を表された。これは後にも先にも善導大師ひとりです。これは非常に重要なことです。

仏像のイメージでもなく、抽象的な観念でもない。また我々はよく仏様とは「はたらき」だと考えたりしますが、そうには違いないのだか、やはり漠然としているわけです。

注意したいのは、「その行なり」という「その」という言葉の意味するところです。「その」というのは指示代名詞ですから、前にあるものを受けて「その」というわけです。

つまり「その」は、前にある「南無」を指すわけです。親鸞聖人もこの点に注意されます。

親鸞聖人は、この善導大師の六字釈をもとにして、独自の六字の釈を施されます。

「しかれば、「南無」の言は帰命なり。「帰」の言は、至なり。また帰説なり、説の字、悦の音、また帰説なり、説の字は、税の音、悦税二つの音は告ぐるなり、述なり、人の意を宣述るなり。「命」の言は、業なり、招引なり、使なり、教なり、道なり、信なり、計なり、召なり。ここをもって、「帰命」は本願招喚の勅命なり。」

（「行巻」聖典一七七頁）

これが親鸞聖人の六字の釈です。

ここで、善導大師の「その行なり」という「その」という言葉の意味するところを受けて、「しかれば、「南無」の言は帰命なり。「帰」の言は、至なり。」と。「至」という字を出されます。

どういう意味になるかというと、帰命というのは、仏のほうが我々に至り届くという意味であると。

そして、なにをもって至り届くのかということで、いろいろな字を当てて、「告ぐる」、「述ぶる」、「宣述る」ということを引き出します。仏のほうが我々に声をかける有様が、仏の行だと。

親鸞聖人は、善導大師の「阿弥陀仏と言うは、すなわちこれ、その行なり。」という、仏陀とは行であるという点に注目されて、行とは仏のほうが我々のほうに声とともにやってくる。呼びかけるという形で、仏のほうが至り届く。至り届くという行である。

こちらが修行などして仏のほうに向かうのではない。仏のほうが我々に至り届く、そういう行が仏という意味なのだと、ご自身の六字の釈で示されます。

仏の呼び声、仏の仰せが我々のところに至り届くということを帰命という。するとどういうことが出てくるかというと、礼拝との違いです。

例えば、ここは宗教施設だから頭を下げなければならないとすると、これは頭を下げる理由は外側にあります。

自分のところは昔から浄土真宗であって、お仏壇がある。だからお仏壇に向かえば、手を合わせ頭を下げると。外側の、自分以外の理由で頭を下げる。そういう、頭を下げる理由が、外側にある場合、これは礼拝になります。

この帰命、礼拝の問題に、最初に注意をされたのが曇鸞大師です。『浄土論註』に、

「帰命すなわちこれ礼拝なり。しかるに礼拝はただこれ恭敬にして、必ずしも帰命ならず。帰命は必ずこれ礼拝なり。もしこれをもって推するに、帰命は重とす。」

（「行巻」聖典一六八頁）

これを身近な言葉に直せば、礼拝と帰命の違い目は、どうしても浄土真宗でなければならない理由が外にある場合と、内にある場合です。

外にある場合は礼拝。そして、どうしても浄土真宗でなければならない理由が、自分自身に見い出されるという場合は、帰命になる。

なぜそうなるかというと、親鸞聖人がご自身の釈で、「帰命は本願招喚の勅命なり」と、帰命とは本願の呼びかけだとおっしゃいます。

本願から呼び出される。本願から呼び出されて、そしてそれについては、否とは言えない。そういう性質の呼び声を聞いた。

そしてその呼び声に従いますという意味が、帰命になるわけです。ですからどうしても浄土真宗でなければならないということになってきます。

そういう帰命ということが我々のうえに起こる。それが「阿弥陀仏と言うはその行なり」という「その行」なのです。

仏様だから頭を下げるわけではないのです。我々が手を合わせ合掌するのは、そのまえに呼びかけがある。

そして呼びかけがあるということは、我々に気づくということがある。ですから帰命ということは、我々にとっては気づくということなのです。

念仏とは、その意味で、数が多かろうと少なかろうと、一生懸命やろうと怠けてやろうと、それは行という意味を持ちません。

念仏が行という意味を持つのは、我々が呼びかけられるように目を覚ました。あたかも肩をたたかれ、目を覚まさせるように気づかされた。そういう気づきを促し、目覚めを促すという意味が行なのです。

そしてその気づきは、「この義をもってのゆえに、必ず往生を得る」と、善導大師は「必ず」と表されます。目を覚まし気づいたということは、我々に自覚を与える。

自らの立っていた場所、生きている有様、それと全く質を異にした世界に目を覚ますということが必ずあると。それを「発願回向の義」という言葉で表されます。

親鸞聖人の釈を見ますと、

「「発願回向」と言うは、如来すでに発願して、衆生の行を回施したもうの心なり。」

（「行巻」聖典一一七頁）

「発願回向」とは、如来のほうから、我々のほうに向けられたものがあると示されます。

発願は、ふつう我々が浄土に生まれたいと願うこころを起こし、浄土のほうにこころを振り向けていくと考えますが、善導大師も親鸞聖人も、如来が発願して、我々に自覚を与え目覚めさせようと、そういう願いを起こして、我々のほうに振り向けられたという意味で「発願回向」を受け取られるのです。

この「発願回向」について『御文』に、

「このゆえに、南無と帰命する一念の処に、発願回向の心あるべし。これすなわち弥陀如来の、凡夫に回向しましますこころなり。これを『大経』には「令諸衆生功徳成就」ととけり。されば無始以来つくりとつくる悪業煩悩を、のこるところもなく、願力不思議をもって消滅するいわれあるがゆえに、正定聚不退のくらいに住すとなり。」

（『御文』五帖目第五通　聖典八三四頁）

これが蓮如上人の「発願回向」の

了解です。我々を目覚めさせようとして、如来が如来の全てをもって我々に呼びかけられたのだと。

そうすると、気づくということに二つあるわけです。闇と光です。一つは、自分の立っている場、思っている事柄は真実ではないと気付いたという面。『御文』のいう「悪業煩悩」が闇の面です。

気づくということにいろいろな表現があります。なんと鈍いものであったとか、なんて大きな間違いをしていたとか、恥ずかしいことをしていたとか、いろいろな気づき方があります。

同時に、気づいたということは、光が当たったということです。光を見た時には闇を離れます。

「無始以来つくりとつくる悪業煩悩を、のこるところもなく、願力不思議をもって消滅するいわれ」と、蓮如上人は「発願回向」を、闇がはっきり見える光に会うことだと表わされます。

南無阿弥陀仏ということは、立つべき場所ではないところに立って生きているものに、それは立つべきところではないことを教え、同時に立つべきところを教える。

それは、親鸞聖人が「勅命」と言われるように、絶対に聞かなければならない、認めるより他はないような出会いを表しているわけです。

別の言い方をすれば、真実と出会う。南無阿弥陀仏というのは、真実と出会う、その出会いを表している。そして真実と出会うという場合には、必ず南無阿弥陀仏という道理がそこに働いている。

我々が、大きな思い違いをして生きていたということに気がつく、目を覚ますというとき、その構造は南無阿弥陀仏という道理によります。南無阿弥陀仏というのは、出会いの道理を表している。こう了解していいと思います。

蓮如上人はそのことを、

「これによりて、南無とたのむ衆生を、阿弥陀仏のたすけまします道理なるがゆえに」

(『御文』五帖目第九通　聖典八三七頁)

と、「道理」という言葉で示されます。

この「道理」とは、善導大師の「この義をもってのゆえに、必ず往生を得る」と言われた「この義」のことです。この「義」という字を、蓮如上人は考え抜いて「道理」と表現された。

蓮如上人の時代に、こういう道理という言葉が使われることは、大きな意味があると思うのです。

蓮如上人の時代は、文字通り乱世の時代です。乱世というのは、道理のない世界です。どこにも確かなもの、これによるというそういう道理がない。

そういう場合、人間はその場その時を生きるよりほかありません。妥協して、状況に振り回されて生きる。

蓮如上人は、そういう状況の只中に、これこそ道理だと。状況がどう変わろうとも変わらない「義」。そういう「道理」を見つけ出したわけです。

我々が出会う、その出会いが真実であるなら、見出されたものが疑いをさしはさむ余地のないものであるなら、その出会いは、南無阿弥陀仏の道理といわなければならない。

念仏とは、真実との出会いの道理を表すものです。いかなる人のうえにも、どういう状況の中においても、真実との出会いが必ずある。まさに一乗という意味が出てくる。

これは我々に大きな希望です。そういう道理を、南無阿弥陀仏が表しているのです。

最後に、考える糸口として申し上げておきますが、真実との出会いによって見出された自分自身について、一点の疑いもないというところに、信ずるという問題が出てきます。

南無阿弥陀仏に、なぜ信心という問題が出てくるかというと、道理に出会って、我々の上に疑いが晴れるということが起こる。

それは疑いなく我が身が信じられるという信が起こるということです。ですから道理に会って得られるものが真宗の信心なのです。

南無阿弥陀仏が行だという意味は、仏の行ということです。念仏が行だという意味は、仏にあっては行。それは我々にあっては信となる。

道理に会えば、そこに我が身を信じ、如来を信ずるということが起こる。そういう意味で、行と信とが離れないわけです。

(平成五年度　第三回講義　平成五年八月一八日)

本の紹介

①わが心の歎異抄（真宗文庫）

著者　今井　雅晴

定価　八一〇円（税込）

親鸞語録とも言われる『歎異抄』の魅力を尋ねる。鎌倉時代に記され、今なお読まれ続ける『歎異抄』。なぜこれほどまでに読まれ続けているのか…。著者のこれまでの歩みをとおしてその魅力をたずねる。後半には、『歎異抄』の成立や著者といわれる唯円の人物像などについての研究成果も掲載。※本書は、二〇〇七年に発行した『わが心の歎異抄』を、語句の整理等を加え、真宗文庫としてあらたに発行したものです。

②浄土真宗の葬儀

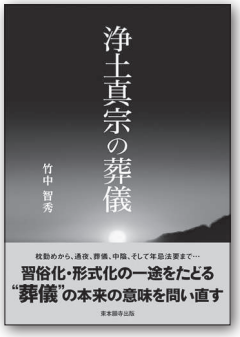
著者　竹中　智秀

定価　一、五一二円（税込）

浄土真宗における〝葬儀〟とは一体なにか…。

本書は、形式化・習俗化の一途をたどる現代の葬儀に危機感をもつ僧侶・門徒の声にお応えして、発行されました。枕勤めから、納棺、通夜、葬儀、埋葬、中陰、そして年忌法要まで…、浄土真宗における葬送儀礼の本来の意味を一つひとつ丁寧に確かめながら、亡き人をご縁に教えに出遇う、ほんとうの「浄土真宗の葬儀」とはどのようなものかを究明していきます。

葬儀の縮小化、略式化の進む今日だからこそ、伝統的な葬儀に興味や疑問をもつ方、そして葬儀を執行する僧侶の方にも是非お読みいただきたい、葬儀テキストの決定版といえる一冊です。



③伝道ブックス82 親鸞聖人と聖徳太子

著者　織田　顕祐

定価　二七〇円（税込）

親鸞聖人が数々の和讃によって讃え、「和国の教主」「救世観音大菩薩」として深く尊敬している聖徳太子。なぜ聖人は、これほどまでの尊崇の念を聖徳太子にいだいたのでしょうか。聖徳太子が日本仏教に果たした役割、そして六角堂の夢告をはじめ、聖人が太子に導かれたエピソードなどをとおして、親鸞聖人の聖徳太子観に迫る一冊です。

④阿弥陀経に学ぶ

著者　廣瀬　惺

定価　一、七二八円（税込）

『阿弥陀経』は、真宗本廟（東本願寺）をはじめ、宗派を問わず多くの寺院で日々読誦され、たくさんの人々に親しまれているお経です。

なぜこのお経は、インド・中国・日本と国を越え、一六〇〇年以上もの時を貫いて、無数の人々に読まれ続けてきたのか。

そしてそこに説かれる阿弥陀という仏、浄土という世界は、現在を生きる私たちにどのように関わるのか…。

『阿弥陀経』を浄土三部経のひとつとして尊ばれた親鸞聖人の受け止めを手がかりに、経題、経典翻訳者、そして経典の内容へと分け入り、人生に苦悩する私たちに届けられた釈尊（お釈迦さま）の大悲のメッセージを丁寧に読み解きます。

お経の領解をたすける「『阿弥陀経』の構成」・全文の書き下し文も収載しています。

編集後記

今回の『震動』第二十七号はこれまでの構成をリニューアルしてお届けします。学院には真宗学、仏教学、教化学、差別問題、声明作法、法規という授業科目があり、それぞれの学科に即した特別講義を年間十回程行なっております。これまでご紹介がかなわなかった科目の特別講義の内容をそれぞれの推薦指導に紹介していただきました。それは学院の学習内容を少しでも知っていただきたいという事が今回の編集のテーマであったからであります。

特別講義はどなたでも無料で聴講できますので、これを機会にますます多くの方に足を運んでいただければと思います。

（黒川　智光）